

eワラントのプット/コールレシオでマーケットの過熱感を見る

ゴールドマン・サックス証券会社 ヴァイス・プレジデント 土居 雅紹

大部分の市場参加者は、マーケットを出し抜いて行動したつもりであっても、バブルに踊っていたり、底値を掴み損ねたりしていた場合が少なからずあるかもしれません。これは、市場参加者がマーケットに対峙する立場であると同時に、自らもその一部であることから当然ともいえます。そこで、市場の動向を客観的に見るツールがあれば、市場の雰囲気の影響されていることに気づいたり、大局的な見方をすることに役に立つ機会は多いと考えられます。市場の過熱感を冷静に観察することができれば、相場の高値圏においてはほとんどの投資家の気持ちが高揚している時に冷静に手仕舞いし、逆に、安値圏においては、周囲が悲嘆に暮れる中で粛々と買いに回るといったことも可能になるでしょう。

そこで、eワラントのプット/コールレシオを過熱感を見る指標の一つとしてご紹介したいと思います。eワラントに投資する際に、株式対象のeワラントであれば、株価が上昇すると思えばコールを選び、下落すると思えばプットを選ぶのが一般的な使い方です。このことから、多くの場合、相場の高値圏ではコールの取引が増え、底値圏ではプットの取引が増えます。この特性を利用して、相場の過熱感を知り、株価変動の転換点を知る目安とするために利用されているのがプット/コールレシオです。

プット・コールレシオ = (プット売買金額 / コール売買金額) の5日移動平均

また、eワラントのプット・コールレシオは、個人投資家主体の取引で機関投資家や裁定取引業者の動向に左右されないことから、特に、個人投資家の心理を反映しやすい指標であると思われます。

プット/コールレシオの見方

毎週火曜日に配信される eワラントメールマガジン(登録無料)では、日経平均とプット/コールレシオのチャートがアップデートされています。プット・コールレシオにはこの数字を下回ったら、この数値を上回ったら、という絶対的な判断基準はありませんが、以下のようなポイントに注意すると良いと言われています。

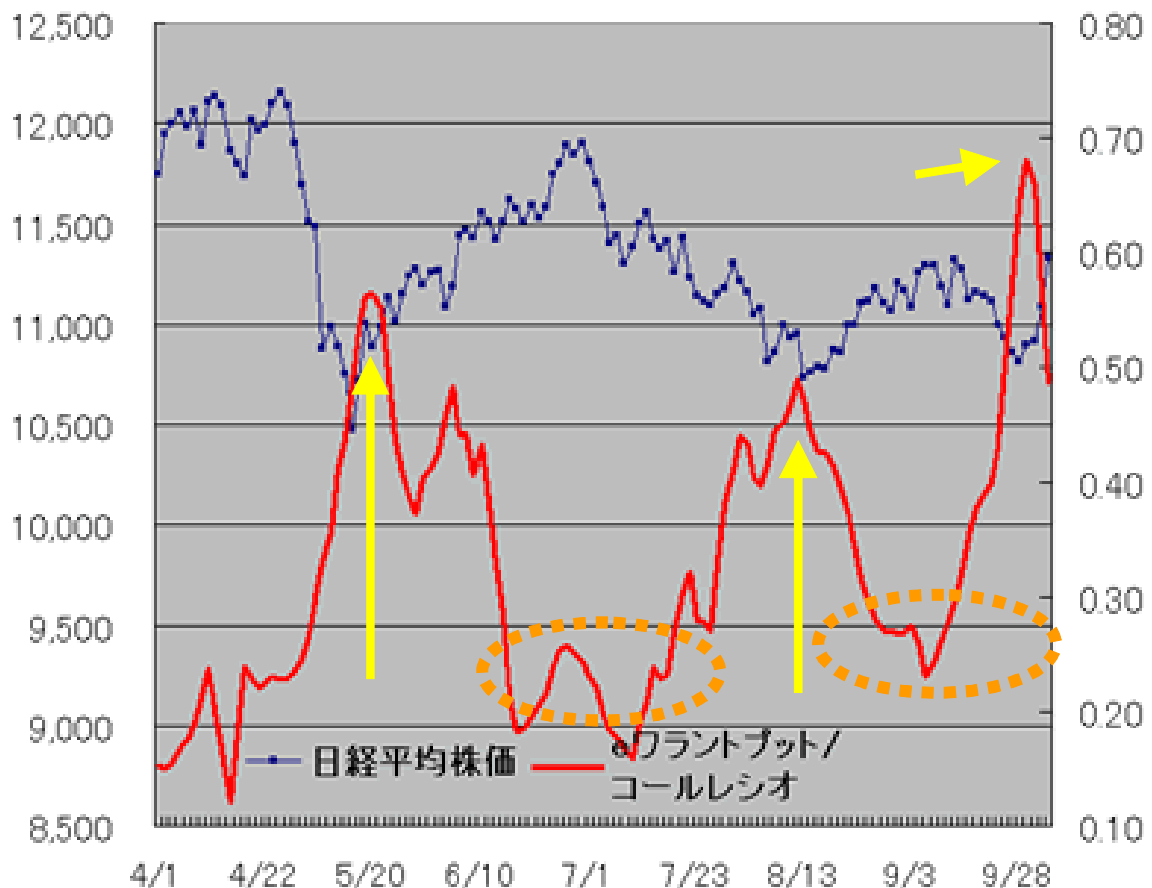
- 相場の高値圏ではプット/コールレシオは著しく低くなる
- 相場の底では、プット/コールレシオが急上昇し、鋭いピークを形成する
- 相場反騰、反落は、プット/コールレシオが反対方向に動き始めた近辺になることが多い。

直近の事例研究

黄色の矢印の部分が、プット/コールレシオが急上昇（プットの取引が急増）した時点で、投資家のセンチメントが悲観的な観測に偏り、取引も相対的にプットに目が向いていたことを意味しています。この時期は、5月（チャート）8月（チャート）の目先の谷となった時点とほぼ一致しています。直近の時点も、と同様に目先の底を示すシグナルと考えられ、その後、実際に株価は上昇しました。

一方、オレンジ色の線で囲まれた付近は、プット/コールレシオが非常に低い（コールの売買に偏っていた）期間です。プット/コールレシオが20%を切る水準においては、コールの20%以下しかプットの取引が無い状態、つまり大部分の投資家の目が相場の上昇に向いている非常に強気な状態にあったと考えられます。同時に、この時期は目先の株式相場の天井となった、時点と重なっていました。

日経平均株価と「eワラントプット/コールレシオ」



(出所：ゴールドマン・サックス証券)

e ワラントのプット/コールレシオの入手法

e ワラントのプット/コールレシオは、e ワラントメルマガをチェックすることで簡単に見ることができます。チャートで送付されてくるので、大変見やすく便利です。

e ワラントメルマガ購読はこちら（購読無料）

<https://www.gs.com/japan/ewarrant/mailmag/index.html>

毎日確認したい方は、e ワラントホームページ新着情報に掲載されている「e ワラント Daily Watch」をご覧ください。前日時点の数値が確認できます。

Daily Watch はこちら

<http://www.gs.com/japan/ewarrant/admin/whatsnew/22.html>

（ゴールドマン・サックス証券会社 ヴァイス・プレジデント 土居 雅紹）

本資料は情報の提供を目的としており、本資料によって何らかの行動を勧誘するものではありません。本資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されておりますが、当社は本資料が正確、完全あるいは且つ最新のものである事を表明するものではなく、またその責任も負いません。尚、当社及び当社の関連会社、役員、社員その他本資料の作成に携わった関係者が本資料に記された企業の証券または（オプションなどの）派生商品の買い持ちや売り持ち、及び売買を時として行うことがあり得ます。事前に当社の書面による許可なく、本文の一部または全部を御社以外の第三者へ再配布することを禁じます。